群青の風
発行所
関市市平賀長峰
岐阜医療技術短大
同窓会
☎(0575)22-9401

ごあいさつ

会長　増田　豊

昨年中秋に創刊号として、機関誌を発刊し、会員並びに学長を始め短大関係者の皆様の温かいご支援により郵送することができました。紙上ではありますが、ここで御礼のあいさつをさせていただきます。ありがとうございました。

機関誌に同封しました返信用はがきも沢山届きまして、喜びも新たにしております。今回はその中で近況報告を書いていただいた会員の生の声を記載しました。好評であれば、毎回記載していきます。

さて、本部役員は5月の代議委員会に於いて新役員にて運営していくことになりました。旧役員同様今後ともよろしくお願いします。年間の活動内容は、機関誌の発刊、国家試験時の軽食のもてなし、それから卒業記念品の贈答などを主な活動としていきたいと思います。

創刊号は役員自らが編集委員をつとめ、役員の負担が増加しましたが、本年度から新たに機関誌編集委員会を設けまして活動していくことになりました。もちろん役員も参加していますが、情報の収集ならびに編纂、校正の敏速化を計ります。これにより会員の皆様に定期的に確実に届くことになることと思います。

創刊号にも書いたと思いますが、本部と全国支部、ブロックの連絡の強化は、年々増す会員の状態を考えましても密にしていきたいと考えております。たしかに、現在機関誌の発刊、地方での同窓会の開催等は行なわれておりますが、医療従事者としてのつながりを具体的に行なえないかと思っている次第です。昨年暮れより本部（岐阜県）に於いてM科2回生新副会長の坂本さんが中心となり、短大施設を利用させていただき、非公式ではありますが、M科の勉強会を発足いたしました。M科、R科、二本立ての本短大の特徴をとらえ将来は合同研究会としていきたいとこのOB会の意向もふまえ行なってみえます。支部やブロックに於いてもM科、R科単独でもそういった活動が発足し、本部との交流ができてくることを願うしだいです。

昨年は学長対談を行ないたいと思っていましたが、実現できませんでした。今年は私自身、OB会のためにも、短大のためにも行ないたいと思います。そうすることにより短大とOB会の将来を見通した良好なる相互関係を維持、発展できるものと考えます。しいては本短大の在学生にもプラスになると信じます。具体的に申しますと、学生の病院実習をとらえてみます。本短大は附属病院をもっていません。そのため、臨床実習は三年生になってから集中的に行っています。会員の皆様も経験があると思いますが、厚生省の定めた臨床実習ということで軽く流しているだけの様な感があります。短大側も受け入れ施設の方々を招いてレセプションを行なってみえますが、受け入れ側の実習病院にも問題はあると思います。実習はその学生自身によって変わるのは当然ですが、この短期間の実習で学生に臨床病院での人間性のある学術を意識させるのは困難です。ですから短大側の実習先の病院の把握、実習病院側の意識のもたせ方というのは、臨床実習の最大の課題だと思います。我々は卒業生として短大への要望は、思いやりがあり、知識を持った後輩の輩出を願ってやみません。

大学の動き

学生部長　杉浦　武

昭和四八年に国際医学総合技術学院が開校され、十年を経た昭和五八年には岐阜医療技術短期大学が開学となり今年で六年目、前身校設立から通算するとあと四年で二十年人間に例えると成人式を迎える年も近くなりました。この二十才になる昭和六七年は本学を含め全国の大学、短大にとって試練の始まる年であります。卒業生諸君も最近の新聞紙上で大学等の名称変更、学科の新設、改編、定員増に関する記事が掲載されているのをご存知かと思います。この新設ラッシュは現在及び将来にわたり社会に要求される人材の養成を目指すと共に大学等への進学対象となる十八才人口の変動に対処しての動きでもあります。この十八才人口は今年一八八万人でこの後五年間上昇を続け、昭和六七、八年には二〇四、五万人でピークに到ります。この増加期に大学等への進学希望者に対し、文部省は恒常的及び臨時定員増で対処する姿勢であります。そのために各大学が社会のニーズを考え新学科の設置、あるいは増員を行っているのですが、十八才人口は六七、八年をピークにその後減少し続け、七年後の昭和七五年には一五一万人まで下降し、昭和六二年の丙甲の年の一五六万人をも下回ります。現在の新設、増員の後に減少期を迎えるのであり、この頃には定員割れを生じ閉校の危

機に合う大学等が生ずる事が懸念されています。この状態はアメリカが一九七〇～七六年の増加期を経て、その後の減少期を体験した状態と類似しています。

さてこのような大学のおかれた状況下で満二十年を迎える医療技術系の本短大でも将来を見ての動きがあります。最近の本学への志願者数は千名を越え倍率も3.0～3.5倍であり数としてはまずまずのものがありますが、さらに全国から意欲旺盛でレベルの高い学生が集まる努力がはらわれています。一方就職の方は臨床検査技師の需要が国試に合格して資格を取得する人数より少し多い定常状態、一方診療放射線技師の需要は国試合格し資格取得をする者より非常に多い状態で共に現状では就職は順調ですが将来的には変化が予想されます。診療放射線技師の場合男子が主体であり、病床数の規制等を考えると現在の拡大期が終わると定常的な状態を迎えることになるでしょう。そうなった中での就職については卒業してゆく学生の資質及び社会に出てから伸びの評価が今後に影響してくるでしょう。そのための学内教育について検討が成されています。一方本学は開学以来2学科で進んでいますが医療技術の総合的な型への移行が構想としてあります。その第一歩として岐阜県の看護婦の不足状況は全国的にみても上位にあり、また看護婦教育に関し県内では短大で行う機関がありません。看護学科を設置し地域の医療への貢献を目的として構想について検討されています。またこれ以外にもニーズの高い医療技術部門について将来的に検討がなされていくのではないかと思います。一方こういった拡大計画と併行して現在の二学科の内容充実及び敷地整備（第一期工事・放射線棟裏の駐車場整備、第二期工事・本館前整備）も進んでおります。以上が全国的にみた大学の動き及び本学の大ざっぱな様子であります。本学の発展も卒業生自身の活躍と非常に深いかかわりがあります。卒業生諸君には本学の進展に対して入学生、教育、実習、就職等の種々な場面での支援をお願いしたいと考えております。

病院等訪問記

R科助教授　小島克之

就職と実習に関連した病院等の訪問を毎年行っている。久しく会っていない懐しい卒業生、学内とは違った雰囲気で実習している在学生に会うのは大変楽しみである。しかし、病院等の責任者に会うまでは何か苦情を言われるのではないかという不安がいつも付いて回る。幸にも、全般的に本学の卒業生も実習生も評判は良く、大変好ましい限りである。時おり青年海外協力隊に参加して外国へ出掛ける卒業生にも会う。また、学会で研究報告をする卒業生もいる。大いに活躍してもらいたいと願う次第である。そして、技師長クラスの役職に付く卒業生が早く出て、就職や実習を気軽に頼めるようになってほしいものである。

最後に訪問したときの情況を少しばかり挙げておこう。

1　技師長「お前の学校の先生が見えたぞ。」卒業生「エーッ、ウソー。」（うそとは何ごとか。）他の学校の卒業生「お前の学校の先生はこうして尋ねてくれるからいいね。自分の所なんか全く来てくれないよ。」（そうだ、少しは感謝しろ。）

2　訪問した日に実習生がたまたま休んでいた。技師長が電話で呼び出す。私「いつもこんな調子でやっているのか。」技師長「日頃まじめな良い実習生ですから、どうかあまり厳しく言わないで下さい。」（これでは立場が逆だ。）

3　窓口の所にいた実習生にいきなり、「どうだ、元気にやっているか。」実習生「アレッ、ワ～～～～。」（飛び上ってただ腰を抜かさんばかり。）

卒業生の顔拝見

M科教授　三宅正美

――実習病院訪問より――

毎年恒例の行事の一つに三学年に対する実習病院訪問があります。今年小生の担当した実習病院の巡回と卒業生の顔を紹介しながら筆をとらせてもらいます。

六月十四日(火)朝自宅出て滋賀県の国立八日市病院をまず最初訪問。小生は初めての訪問で、小西技師長さんに会うのも初めて、しかし、小西技師長さんは前の病院の勤務の時に、国際医学（以下国医と略す）第四回卒業（S・54年3月）の沖本寛君のご媒酌人を引受けられたとのことで、何かと本学の卒業生の面倒をみてきておられた様で、全然無縁の方でなく、たいへん感謝の念をいだいた訳であった。又短大卒（第二回）の吉金君が就職しており、心強く感じてこの病院を去り、次の病院即ち、近江八幡市立病院へと向かったのです。この病院も小生にとって初めての訪問で、国医第七回卒の北川君・短大第一回卒の鯉堂君・短大第三回卒の五嶋君ら三人が熱心に仕事をしており、仲々皆頑張っている様子であった。

次に大津市の市民病院を訪問し、丸本技師長さんと面談、更に国医第三回卒塚本豊子君・第八回卒谷口君にも会いしばらく歓談、三人ともちろん結婚しており良き親として家庭に、仕事に頑張っている様子であった。続いて、郡立高島病院を訪問し、国医第三回卒の岸君・第五回卒の古谷君と会い、夜には彼らと会食、しばし昔の話に花を咲かせたのであった。そして高島町に宿泊。あくる日公立小浜病院に向い、この病院では、

国医第八回卒の正木里美君・短大第一回卒の芝井美智代君の二人が頑張っていた。次に公立小浜病院を後にして舞鶴へと向ったのです。最初に舞鶴市民病院にゆき、短大第一回生卒の棚村君に会い、久しぶりに再会を喜んだのでした。そして国立舞鶴病院を訪問した。この病院での一つの楽しみがあった。それは国医第一回卒の星野康二君に会うことであった。早速検査室にゆき、彼を呼び出した。元気そうで学生時代の面影はあまりなく、それなりに貫録ができ、一〇年以上のベテラン技師としてすごく立派に変っていた。彼もたいへん驚いた様子で、まさかこの地まで小生が来るとは思ってもおらなかったと思う。又、国医第八回卒の宮下智子君・第一〇回卒の木下真理君・そして第七回卒の中野智子君、なつかしい名前がその病院にあり、皆んな元気に勤めていた。皆んなたいへん喜んでくれて、教師冥利に尽きるところであった。

しばし皆んなと歓談し、再びこの地をおとずれる時にはあらかじめ連絡をして集まることを約束し、病院を後にした。その後福井を経て、北陸方面へと向かったのですが、紙面の関係で今回はこれまでと致します。

今回小生が訪問した病院で本学の卒業生幾人かと会い、それぞれ先輩として後輩の面倒をよく見ており、やはり「同じ釜の飯を食べた」という事から固く結束しているようで、たいへん頼もしい限りであり、嬉しく感じた。又その他各病院の技師長の方々、そしてその他の人々に会えたこと即ち、人との出会いが沢山あったこと、これは小生にとっても勉強になり、たいへん貴重な経験であったと思う。この「人との出会い」こそ、これから大切に温めていかねばならないと新ためて肝に銘じ、帰路についた次第です。どうか卒業生の諸君、これからも人との出会いを大切に、悔いのない人生を歩んで下さい。

（昭和63年9月記）

偶感

桐田一吉

公職を退いて、十二、三年にもなろう。入会している学会誌にずっと目を通してはいるが、近頃ではだんだんと面倒な気がしてきたし、知っている諸先生も、大方は一線を退かれたようで、興味も薄れてきている。

関係した第一回から第三回の卒業の諸君も、今はそれぞれ職場では中堅幹部として、或は家庭にあっては子育てに、何かと多忙な毎日であろう。

今は年賀状をくれ、その添え書きによって消息の一端を知るぐらいのお附き合いとなっている。それぞれがいろんなことを体験してきたことであろう。健康で頑張っていてくれることは喜ばしいことだと思っている。

同窓会事務局より、「あの人は今」との仮題もあり、機関紙「群青の風」に掲載したいとのこと。

一昔前のことで大方は忘れてしまっていて、御期待に副えそうにない。今さら自分の非力や失敗談でもあるまい。教師であった因果で、偶感でも書いてみたら、どうかと思った次第である。

近代の思想家亀井勝一先生の言葉に

『人生、邂逅し（かいこう、思いがけなく出合う）開眼し（目を開いて見る、さとる）瞑目す。（めいもく、目をつぶる、死ぬる）』と。（括弧は辞書をひいた）

すばらしい言葉だと思う。禅でもなさったかしらと思う。

今までに沢山の人や事柄に出合って、そうして、多くを学び、蓄積もしてきた。すっかり忘却していることも多いだろう。あまり活用することはなかった。所謂平均寿命を越えた。身の廻りの整理が必要なのかもしれないし、余生を如何に過すか、など考えねばならないかもしれないが。自分ではそれほど年をとったという気はしていないけれども、鏡を見るとそれ相応の皺はできている。

隠棲しているとはいえ、つまらない人生を送っては申訳ない。やれることをしっかりやらねば、機会というものは再び巡っては来ないし、他人にやってもらっても、自分のやったことにはならないし、「今日一日の自己に、現在の自己に真心を尽くして生きる以外に生きる道はない」と誰かの言葉に励まされ、反省もしている今日です。

（昭和63年7月24日記）

賛助会員（教員）移動

〈退職〉
R科助教授　岩崎雄二
一般講師　小島克之
M科助教授　松波　勉

〈昇格〉
R科助教授　山城光俊
一般助教授　吉岡義正
M科講師　黒部真章
佐井篤儀
伊藤　実
島澤　司

〈新任〉
M科教授　川出真坂
R科教授　坂田一記
一般教授　杉本直人
M科講師　幅　猛
看護科設準教員　森岡美智子
森山真由美

ご存じでした 同窓会を開催される幹事の方へ

参加人員10名以上の同窓会を開催された時は、全員で写った写真を一枚、事務局まで郵送して下さい。一人　五百円の補助が、受けられます。詳細は、事務局、小野木または丹羽まで、ご一報を！

懐旧

毛利金吾

五十年前の不景気のさなか京都の放専を卒業して社会に放り出された私は以来約四十年放射線診療業務にたずさわり完全に放射線漬けの身となりましたが其の後定年を期に足を洗い新設の神野学園にて教職の身となりました。

そして新しい学校社会で苦闘すること十数年数多くの学生に接してきたわけでありますが此の間何と云っても最後までつらかったのは不便な関への通勤でした。その悩みの種も年令と共に終いに力つき二年前に退職した訳であります。その間五十年頃には竜泉寺温泉病院なるものも開設され、それと同時に其の診療業務にも教鞭をとるかたわら出職致し暫らく通勤したことなども其処が一風変った診療内容であっただけに、つらい事もあったが私としては一生忘れられない思い出の一つになっております。さて関に通うようなった御かげで大変嬉しく思った事の一つには、教員の中で非常に珍らしく立派な方々に偶然御会い出来る様になったことであります。何れも非常勤の先生方でありますが、その中の御一人で温厚そのものの元岐大教授故石口先生、それに立派な髭を貯えて居られたのが特徴で大分通勤にも苦労されていた元三重大教授田口先生、次に現在も教鞭をとって居られる久保田先生、いづれも長い間のギャップがあっただけに其の再会は将に千載一遇、懐しさ一杯でした。久保田先生は数十年前に豊橋市民病院の放科部長として活躍して居られた時代に一度御会いしたのみでしたが再会時には昔の茫々した黒髪こそ見られませんでしたが古きレントゲン集談会開催時の記念撮影写真に残っている面影は昔そのままで全くなつかしく感ぜられました。併しその再会も日頃から自分の最も私淑していた先生だけに僅かな年月で御別れしなければならなかった事は残念の極みでした。又もう一かた物凄くなつかしかったのは以前にやはり外来講師として遠く東京から集中講義に来ておられた志賀達雄先生でした。私がそもそも先生の名を知ったのは先生の著わされたエックス線診療必携なる本を手に入れてからのことであります。因みにこの本は昭和十八年頃購入したものですが何と出版は肇国二六〇〇年紀元節の佳節としてあります。当時は専門書とて余りなく、むさぼり読み私どもは大変役にたったものです。その当時志賀先生の肩書きは警視庁衛生技師医学士とあります。この本が偶然手もとに残っていたので御会いした際早速その御話をすると「それは骨董品もいい所だ。今に値がでるよ」と大笑いされ暫し談笑したものであります。又先生は知る人ぞ知るレントゲン界草分け時代に君臨された大物でもありまして此の様な方々と遭遇出来たのも、いつに教職社会に入った御かげと其の点は喜んでいるところです。何れにせよ今では先生がたの御健康と御長命を切に願ってやみません。

さて其の後私は名古屋の知人病院長の依頼をうけて二年ほど前から週三回ほど顔を出していますが、そこでびっくりした事はなんと小生の留守に時折り学院の卒業生が今では立派な技師となられて夜間放療に来ておられるとの事です。因縁と申しますか其の逞ましさ、力強さには全く嬉しくもあり又愉快に感じている次第です。年はへだててはいるものの古き師弟がたまたま同じ場所で同じ道に邁進出来ようとは誠に笑ましくさえ感ずると同時に己の老いの将に至らんとするのを痛感致しました。何れの社会でもそうであろうが若き後輩卒業生諸君も何れ親を離れ乗りこえ力強く羽ばたいて行かれる事を衷心より希っているものであります。

今では同窓会会員も二千数百名に達し皆夫々の分野で活躍して居られる様子を見たり聞いたりしていますが会員諸君には決して楽して栄冠を求める事なく若いうちは自ら進んで苦難にぶつかり七転八起おのれを磨いてそして立派な業績をあげて欲しいと思います。在籍中私はよく自室の窓から学生の放課後のサッカー練習など眺めて其の真摯な頼もしい姿に感じ入っていたものです。スポーツの趣味も結構で成るべく多くの趣味をもってそのまま病院に就職されるのも良いかと思います。社会に出て社交的にもきっと役立つことがありましょう。

因みに故石口先生は「放射線技師も須らく何か良い趣味を多く持て」と云って居られた由に聞いておりますが大変穿った言葉だと思います。趣味は人生をゆたかにし心のゆとりをもたらすものなのであります。

さてずっと昔私は学校を卒業する際に時の校長浦野多門治博士（当時レントゲン医学会の重鎮）から「君、これからどうするか、此処だけでは駄目ゆえもう一度勉強しなおして医歯業方面にでも進んだ方が良い」とアドバイスをうけた覚えがありますが、その時のショックは末だに忘れていません。併してその後技師職も立派に確立され優秀な技師が輩出し今日の技師諸君は大変幸せだと思います。このうえは同窓生の中からも大いに技と人を磨いて社会に貢献する立派な技師が多数生まれてくるを信じて止みません。

以上思いつくがままに乱文を綴り失礼致しました。最後に同窓会の御発展を心から御祈り致します。

支部だより

三重支部

三重県衛生研究所
国・六回生・M科
高橋裕明

僕がはじめて関の町に入ったのは、昭和五十三年三月末のことでした。その時僕は、すでに二十七歳を数ヶ月過ぎており、多分に不安な気分に包まれていました。その日のどんより曇った天気の影響もあったと思われます。

はじめて見る大都会とは言い難い、関の町の持つ雰囲気に飲まれたせいでもありました。しかし、それまで様々な土地で暮らした経験もあり、転居にはかなりすれっからしになっている僕にとって、気分の重荷になっていたのは、やはりそれから始まる三年間の生活への漠然とした不安でした。キラキラとした十八歳の世界にはおそらく、立ち交われるはずもないだろうし、これはやはり、孤高のおじさんとして、一人静かに暮らさなければならないぞと、悲愴な決意を固めたものでした。

しかし、実際学校の生活が始まってみると、案ずるより生むが易しとはよく言ったもので、孤高のおじさん路線は何処へやら、トロくさいおじさんとの評価を受けながらも、みんなの愛に包まれて（？）、僕にとっては二度目の青春とも呼ぶべき月日を送ることができました。

学校での三年間は、僕に様々なドラマとの思い出と、そして素晴らしい友人達を残してくれました。

僕は当時、清く正しいおじさんだったわけではなく、現学長の小林先生から授業中に、「この中に、すでに思慮分別のなければならぬ年齢に達していながら、率先して騒いだり遊んだり、若い人に悪影響を与えている者がおる。」と、名指しこそなかったものの、明らかに僕とわかるお叱りをうけたこともありました。しかしそれもこれも、全てキラキラとした思い出の中にあります。非常に前置きが長くなりましたが、まだ生まれたばかりの国際医学総合技術学院同窓会三重県支部、これから支部長を中心に活動していきますので、皆さん御助力をよろしくお願い申し上げます。

岐阜県支部

岐阜　東海中央病院
国・二回生・M科
坂本寛文

昨年末から行っている勉強会（談話会）について報告します。

機関誌第一号の編集反省会で、卒業数年の若手技師より勉強の場が少ないので、OB会でやってほしいと提案があり、試行することとなりました。

内容については、毎回、近辺の卒業生の内からテーマにふさわしく実践でがんばられている方にお願いをして、夜七時半から一時間の予定で行っていますが、時間が過ぎるのも忘れてしまうほど内容は充実しています。又、日頃同じ分野で困っている参加者からは、現実、直面している問題が出され、教科書では触れられていないポイント等ディスカッションがなされる反面、他の分野の参加者には、学生の頃勉強した基礎的な内容にもふれ、もう一度再勉強の場にもなり有意義なものとなっている様です。

まだまだPR不足と平日の夜ということもあり、参加者の少ないのが現状ですが、中には在学生も顔を出してくれはげみになっています。

毎月、一度の集りを目標にしているが、次回のテーマを何にするかとまどうこともあり、又、現在はM科中心のテーマのためR科の参加が少ない等の問題があるので、会員の声を取り入れ除々に改善してゆき参加者を増して行きたい。

近年、多方面で色々な卒後教育センターが行なわれているが将来的には、本学の特徴を生かした内容を取り入れ例えばM科・R科共通のテーマや症例検討会を増やしてゆけばと思っています。

現在までのテーマ

毎月最終水曜日
夜七時半より九時
本学、M科事務室にて

第一回
S62・11・25（水）
講師　東海中央病院　林　博之
演題
〝心電図の波形の成り立ちと期外収縮〟

第二回
S63・1・27（水）
第一回のつづき

第三回
S63・2・24（水）
講師　東海中央病院　坂本　寛文
演題
〝胃癌と腫瘍マーカー〟

第四回
S63・3・30（水）
講師　岐阜医療短期大学　丹羽　民和
演題
〝FAB分類について〟

第五回
S63・4・27（水）
第四回と同じ
演題
〝リンパ腫について〟

第六回
S63・5・25（水）
講師　県立岐阜病院　森　晴男
演題
〝呼吸機能について〟

第七回
S63・6・29（水）
林　博之
演題
〝連合性弁膜症の一症例〟

第八回
S63・9・28（水）
講師　社団法人　岐阜病院
（R科）岩田　一成
大塚　誠
演題
〝脳波とCT〟

第九回
S63・10・26（水）
講師　岐阜医療短期大学
R科　小野木　満照
演題
〝CTの基礎的原理〟

第十回
S63・11・29（火）
講師　美濃加茂保健センター　三浦　丈志
演題
〝集団検診における血糖負荷試験について〟

第十一回
H・1・1・25（水）
講師　東海中央病院
R科　長尾　康則
演題
〝腹部超音波〟

シリーズ The 下宿

スチューデント・プラザ編

聞き手　事務局　板津さん

開学当初より、本学最大規模を誇る学生寮、通称プラザは、昭和六三年度も、学生五九名（男四七、女一二）を抱え、日夜忙しく活動しています。そこで、寮監である板津氏に思い出話を語っていただきました。

板津氏は現在、加茂郡富加町議会・副議長としてご活躍されており、そのお忙しい最中にインタビューさせて戴きました。

事　本日はどうもありがとうございます。早速ですが、下宿をされての思い出話をうかがわさせて下さい。

板　開校後、二年目より下宿を始めましたが、何故か昔の学生の方が親しみが深いです。現在でも年に数回、卒業生の結婚式に招かれます。同級生同士とか、下宿の先輩・後輩で結ばれることが多く、是非、結婚式に出席してほしいと依頼があります。昔は、管理棟の中に売店をおいて、本から米・卵に致るまで日用雑貨品を販売していました。店番していますと、学生が毎晩のように、おじさん、おばさんとやって来て、一〇時、一一時まで話していく。ですから、個々の学生の家庭事情、生活環境が手にとるようにわかりました。それらの学生は今でも、いっしょにゴルフやキャンプに行ったりしています。

事　結婚式にはどのあたりまで行かれましたか？

板　北は北海道から、南は沖縄まで全国版ですね。

事　昔の学生と今の学生とではどんな点が、異なっていると思われますか？

板　下宿管理上の考え方の基本は、「常に自分はその子たちの親である。寮生は自分の息子であり、娘である」という気持ちで接していますが、今の二年生以後の子はかなり感じが違います。毎年、入寮時に自宅で、三年間の下宿生活をする上においての注意事項、連絡事項を三時間ぐらいかけて説明しますが、その一つに「朝・顔が知らない人でもあいさつはきちんとしなさい」と言っています。形の上では、守られていますが、管理人のところまで遊びに来ることがなくなり、用事が終わるとさっさと帰ってしまうのは、寂しい気がします。昔のOBは、今でも五月の連休になると七～八人は集まって来ます。この中には私になぐられた学生もいます。

事　どんな理由で……？

板　三年生の勉強の防害をする行為はきびしくとりしまります。例えば、午後一〇時を過ぎても騒いでいる時などです。たいていはよそから遊びに来た連中がいっしょですが、注意してもやめない時は、なぐりました。しかし、たたかれた者ほど、今だに来て来れるというのは、慈悲の心のムチならば、うらまれることはないのかしらと思ったりもします。一度、郡上のラドンセンターでプラザのOB会をやったことがありますが、その子たちがまた今年か来年にまた長島温泉ででもやってほしいと言って来ています。

事　最後に、板津さんのご家族の状況等を……

板　長女は尾張旭に、長男は春日井に、次女は奈良に住んでいます。孫も上は、大学一年生から下は小二まで六人います。そちらにもOBがたびたび遊びに来ているようです。下宿生はみんな家族だと思っていますから、旅行に行った時なども、日本中に診療放射線技師・臨床検査技師がいて、大変心強い限りです。

プラザのOBのみなさん、おじさんは今もとてもお元気です。はがきを頂いた人には必ずTELしているとのことです。おじさん・おばさんの声の聞きたい人は、プラザにはがきを出しましょう。

シリーズ 下宿プラザ

副寮長　2R―2　大須賀智

スチューデントプラザは収容人数が約六〇名いう清心寮をのぞけば一般の寮としては一番人間の多い所ですが、三年生や管理人の板津のおじさんのおかげで楽しくのどかに過ごしています。

これだけの人数がいるとバラバラになりがちですが一つの事をするにも人数が多い分大きなことができ、年中行事みたいになったものが幾つかあります。そしていつもこれらの事でおじさんと底抜けに明るいおばちゃんに何かと迷惑をかけてしまっていて、みんな心から感謝しています。

天然寺学生寮編

大屋さん
聞き手　坂本寛文

学生寮の老舗、天然寺寮にSPOTを当て今昔の学生気風について鋭く抉ったinterviewを強行。果してその結果は？

※今回の取材には大屋さんに加えご令嬢明美さん（天然寺元マドンナ）も同席。坂本氏のinterviewにも俄然力が入りvoltageも上昇また上昇。

五年ぶりの再会

坂「今晩は。失礼します。アッ！」

マド「坂本君、ようこそ。ご無沙汰しています。」

坂「久しぶり、明美。」

※久々の出逢いで坂本氏は一気に……

（中略）

アルコールにも礼義あり

坂「酒＝天然寺と言われる程アルコールが似合う天然寺ですが、最近異変ありとか。」

大「昔は酒豪揃いやったけど羽目を外しそうな時は先輩がビシッと押え、お酒を心得ていたね。けど今の子は〝ケンカの仕方教えます〟ではないけれど、飲み方を知らんのではないかナァ。」

マド「お酒を飲む行事も今は以前に比べ減らしていると母が言ってますね」

（中略）

続けたい天然寺会

大「そうそう、毎回天然寺会の案内を戴いていますよ。」

坂「天然寺出身者も人が増え喜ばしい事だけど、逆に収拾がつきにくいことも現実、でも、今後も続けますよ。」

※「嬉しい頭痛の種」と苦笑

（中略）

団欒は食事付

大「寮生の献立をしていた頃は大屋と店子との交流が盛んで楽しい日々でした。自炊が主流となった今、ちょっぴり寂しい限りです。」

坂「夜の方は？」

大「……」

（中略）

坂「良き伝統の継承と天然寺魂を胸に巣立ってほしいものです。」

※「ほ」の字ムードのinterviewでした。紙面の都合上、一部割愛しました。お詫びします。

会員の声

国M二　中村さん

昨年病気をして現在、家で養生しています。何分白内障の手術をしたもので、これから又検査技師をしていく自信がないのですが、又仕事ができる様になれば連絡します。

国M十　平野さん

諏訪地方には比較的同窓生が多く心強い毎日です。国際及び岐阜短大卒業生も全国に広がっているわけですが、短大も卒業生の学習場所に活用できればと思いますが…。今後の同窓会活動に益々のものを期待します。

国M三　五味君

就職がやっと決まりほっとしています。仕事にもよくなれ、流れもだんだんわかってきました。藤田ばかり、十三人もいる中うちの大学は一人なので、岐阜の大学は！といわれないようにがんばります。

短M三　北出さん

いろいろな仕事が次から次へと入り慣れるのに大変です。剖検、実験動物など今まで縁の薄かったことができるのですが、剖検などは夜も呼び出されたりすることもある。

短M三　小林　君

最近思うこと!!

医師だけでなく今後は、検査技師等も卒後教育が必要になってくるのでは？

国M二　前田　君

二級臨床病理技術士にも合格したので、そろそろお嫁さんに行こうかな、行きたいなと思っています。

国M八　溝口さん

福岡に来て丸五年がたちそろそろ我郷里、宮崎に帰りたいですね。

国R六　柿木　君

事務長兼務の為、特に最近は人事、看護婦不足対策におわれて多忙の毎日です。

国R九　古川　君

自転車競技をはじめました。二年後の国体をめざします。

短R一　小池　君

月に二週間の長崎出張と福岡勤務のくり返しです。いそがしくもあり楽しくもあり充実した毎日です。

短R一　伊藤　君

卒後六年目を迎え、現在中堅の位置になりつつ…。学生時代よりも更に臨床に即した勉強の必要性を強く感じている現在です。

国R五　里　君

小林寺拳法部はなくなってしまったのですか？

（編・残念ながら廃部になっています。）

国R五　三浦さん

心臓カテーテル検査に追われる毎日を送っています。豊橋での生活も来春でまる三年。ヤマサのちくわを食べて頑張っています。

国R七　森　君

福岡に四年余り在住してこちらの方へ帰って来ました。少し心残りですけれど今度は佐世保のために働きます。

国R八　松添　君

注腸検査なんて…きらいさっ！二月にCTが入ります。

短R一　竹内さん

聴力検査（一般から特種）平衡機能検査、現在では音声・言語機能検査ら訓練（ST）の勉強も始めています。臨検範囲の仕事ではないけれど勉強することも多く、日々は充実しています。臨検技師ではなく、一医療従持者として働らいています。

クラブ通信

〈バスケット〉
岐阜県学生リーグ（春）
男子　3位
女子　4位
〈バレー〉
県下私立短大戦
男子　3位
女子　一回戦
〈軟式野球〉
働く青少年大会（関大会）　準優勝
〈テニス〉
県下私立短大戦
ダブルス男子　優勝
〃　準優勝
岐阜県学生リーグ
個人戦　BEST16
岐阜県大学リーグ
団体戦　BEST8
〈バドミントン〉
岐阜県学生リーグ
ダブルス男子　準優勝
ダブルス女子BEST16
〈写真部〉
関写真展　佳作
〈卓球〉
県下私立短大戦
男子　2位
女子　4位

同窓会事業報告

○昭和62年度事業報告

一、機関誌『群青の風』の発行
一〇月二八日に全会員に発送。

二、国家試験時の昼食の配給
本会活動の啓蒙のために、パン、牛乳、ジュース等を配給した。

三、卒業記念品の贈呈について
第三回卒業式（三月一四日）において贈呈した。

○昭和63年度事業予定

一、同窓会会員名簿について
昭和65年度頃に発刊できるよう準備をすすめる。

二、機関誌について
機関誌の発行は継続していく。

三、国家試験時における昼食の配給について
継続する。

四、卒業記念品の贈呈について
継続する。

五、大学祭への参加について
本年度も参加する。
学生時代の写真他本学に関する物品の提供を会員に呼び掛ける。

六、会則について
幹事の変更に関する規約について成文化すべきである。

同窓会会計報告

〈収入の部〉

項目	62年度決算	63年度予算
会費	2,030,000 63年度分も分表	0
繰越金	2,111,203	3,589,461
その他	71,908	0
合計	4,213,121	3,589,461

〈支出の部〉

項目	62年度決算	63年度予算
活動費	220,770	250,000
会議費	137,760	150,000
交通費	144,000	200,000
慶弔費	2,610	10,000
通信費	153,600	160,000
助成費	9,000	20,000
その他	5,920	70,000
定期預金	2,029,496	2,300,000
普通預金	1,511,965	429,461
合計	4,213,121	3,589,461

昭和63～64年度役員

会長	増田　豊	（R3）
副会長	坂本　寛文	（M2）
	大塚　誠	（R1）
書記	武藤　延秋	（短M1）
	渡辺　享信	（R8）
会計	森　晴雄	（M6）
	小瀬木芳寿	（R3）
会計監査	伊東　明宏	（M9）
	井戸　泰伸	（短R3）

住所、勤務先など変更は事務局まで

投稿を待ってます……
論文、紀行文、ひと言

編集後記

創刊号に続き第2号が完成しました。ここまでの道のりは大変でしたが、会員の直接の声を掲載しました。いかがですか。

さて、今年も様々な出来事が皆さんの人生の一ページを飾ったことでしょう。

来る己年も素晴しい年でありますように。

関市の丘辺も寒風が吹き、刻一刻一と新年が近ずいて来ています。